

原著論文

モラエスの「徳島」

～グローバリズム考～

宮崎 隆 義

Moraes's 'Tokushima'

– On Globalism –

Takayoshi MIYAZAKI

要 旨

ポルトガル人ヴェンセスラウ・デ・モラエスは、徳島で16年間過ごして没した。徳島の土地と人々を慈愛に満ちた目で描いた『徳島の盆踊り』は、100年前の徳島の姿を祖国ポルトガルに伝えている。異邦人としてモラエスが徳島をいかに眺めていたか、それを知ることがグローバリズムを迎えている現代において、我々に対し、異邦人の立場を理解する上で示唆するものを多く含んでいる。

キーワード：モラエス，徳島の盆踊り，グローバリズム，異文化理解

1 モラエス

ヴェンセスラウ・デ・モラエス (Wenceslau de Moraes, 1854–1928) はポルトガルの海軍軍人で、後に神戸においてポルトガル領事館総領事を務めた人物である。1913年に総領事を辞し、徳島に移り住んで16年間、伊賀町にあった四軒長屋の寓居で質素な暮らしを続け、74歳でその生涯を終えた。祖国ポルトガルに帰ることは決してなかった。モラエスは徳島に来住する以前から、祖国ポルトガルに文筆家として見聞録を書き送り一定の評価と名声を得ていたが、徳島に移り住んでからは、徳島の人とその生活を慈愛に満ちた目で眺め、『徳島の盆踊り』¹、『おヨネとコハル』²に生き活きとその姿を描き出している。集大成となった『日本精神』³は、海軍軍人であり外交官、領事としてのモラエスの、日本とそこに住む日本人の国民性を捉え、日本人の本質に肉薄しようとしたものと考えてよい。

モラエスは、ポルトガル人として、ポルトガル語で日本と徳島を祖国ポルトガルの知識人たちに伝えた。100年も前に、一地方都市に過ぎなかった徳島がポルトガルを通してヨーロッパに伝えられていたのである。そのことだけを考えても徳島にとって奇跡的なことであるといえる。

いが、「グローバル」という言葉が半狂乱的にと行ってよいほどに叫ばれている今日、モラエスという人物をひとつの例として、「グローバル」ということのその本質的な意味を考えてよからうし、また考えてみる必要があると思われる。

「グローバル」という言葉が今いろんな分野で声高に叫ばれている。ある意味で今の時代のキーワードのひとつでもあるが、その意味は多様で、いろんな分野のいろんな人が都合よく手前勝手に使っているきらいがないでもない。大まかには経済原理が主導している領域で、かつての日本の経済力の陰りを憂い、その復活と再生を目論んでこの言葉を使っている傾向があるだろう。だが、その一面だけを取り上げて眺めてみても、その根底には越境ということがある。それ故に「グローバル」(global)なのであって、国境を意識した「インターナショナル」(international)とは次元が異なっている。経済の世界ばかりでなく、政治、科学技術、医療、環境、文化、芸術など、ありとあらゆるものが国境を超え、まさに全地球に及んでいき、複雑な問題を生み出しているが、それが現代の世界の姿なのである。かように複雑に絡み合った問題を解く手掛かりは、ひとつの価値観に囚われることなく、複数の視点から眺めてみることであり、同時に多様な価値観をいかに認め合うかということであろう。

人や物、芸術、文化の往来と相互の影響関係には長い歴史というものがあるが、それも越境故にそれぞれがその地域で豊かで深いものになっている。その往来のひとつの例、人の往来の例として、徳島のモラエスをここでは取り上げてみたい。モラエスは何回か日本にやってきた後に、前述したように、1899年から日本で暮らし、その後1913年から16年の間、徳島の地で庶民の中で暮らした。軍人、文人、外交官、領事という経歴を通して、その当時の日本を、そして徳島を眺めて、幾多の作品を書き残している。そこには、時代を超えて現代のわれわれに対して示唆を与えてくれるものが多く含まれている。モラエス、そしてその作品を通し、グローバリズムと異邦人ということ 키워ワードとし、異文化理解を根底に置きつつグローバリズムについて考えてみたい。

II 異国としての「徳島」

『徳島の盆踊り』は、神戸で亡くなったおヨネのふるさとである徳島に対するモラエスの特別な思いが込められている。作品の中に「おヨネ」という言葉は決して出てこないが、むしろ、秘められているが故に、モラエスの、おヨネのふるさとである「徳島」への強い思いをうかがうことができるというよい。

モラエスは徳島にやって来た時の印象を次のように書いている。

夏の晴れた日の午後—正確に言うと、一九一三年七月四日の午後—船を下りて、私のために用意されていたごくささやかな住居に歩いていったときに受けた徳島の第一印象は、これ緑・・・・という圧倒的な、だが快い印象であった！陶酔した瞳の中にどっと入り込む緑。ふるえる鼻孔にどっと流れこむ緑。緑、緑、緑一色！・・・何ひとつ考えることをゆるさ

ない、目の前にくりひろげられてゆく風景のディテールに注意を向けることをゆるさない、まことに強烈な、排他的な印象。色と香りによって生み出された陶酔感とでも言えよう。(59-60)⁴

他説もあるがモラエスが徳島にやってきたのは、上掲の引用にも記されているように、7月4日であったろうとされている。だが当時7月4日は小雨交じりの天気だったらしく⁵、今とは気候が多少異なるとはいえ、梅雨の後もあってその蒸し暑さは当時でもかなりのものであったろうと推測される。夏真っ盛りを迎えようとする7月の初めが、海軍軍人として赤道下のアフリカやマカオでの滞在経験があったとはいえ、果たしてモラエスにこのような爽やかな印象を与えたものであろうか、多少疑問に思われるところである。実際、この直後にモラエスがポルトガルの妹フランシスカに宛てた絵葉書には、徳島の暑さを次のように書き記している。

7月15日

とても暑い。・・・

7月25日

ひどく暑い。焼けつくようだ。リスボンでもとても暑い由。・・・

7月29日

僕は元気だが、とても暑い。・・・

8月9日

ひどく暑い、日本中そうだし、恐らくそちらもだろう。

8月13日

ひどく暑い。⁶

『徳島の盆踊り』においては、前述したように、あたかも新緑の緑に萌える爽やかな「徳島」の姿が浮かんでくる。しかしながら、実際にモラエスが暮らし始めた「徳島」は、妹フランシスカに書き送っていた絵葉書の文面からもうかがえるように、かなり現実的であって、100年後の現代のわれわれもよく知っている、耐え難い夏の「徳島」が感じられるのである。その「徳島」は、追慕の対象であるおヨネへの想い故に美化された、一種の楽園のような世界になっているといってもよい。それが日本という異国に幻想を抱いてあこがれ、モラエスと同様に日本を訪れたピエール・ロチ (Pierre Loti, 1850-1923) やラフカディオ・ハーン (Patrick Lafcadio Hearn, 1850-1904) などが抱いていた幻想と同様であり、同じ心的傾向であると見なしてよからう。現在、日本を訪れる外国からの多くの観光客たちが求めているのは、欧米化された日本の姿よりはむしろ、幻想のように伝えられている日本、街の片隅のどこかに残っている古くからの日本独特の風景や習慣の場面、生活の断面であることは言うまでもあるまいが、モラエスも、「徳島」に対して、あるいはそれに

前に「日本」に対して、異邦人として幻想的なほどのイメージを抱いていたことがうかがわれるのである。

初めてマカオから日本にやって来て長崎に入港したときの様子を、モラエスは感極まった調子で次のように書いている。

ぼくはすばらしい国、日本にいる。ここ長崎で世界に比類のないこれらの木々の陰で余生を送れたらと思う。⁷

モラエスにとって、「日本」が、モラエス以前に訪れた旅行者たちの描いた、夢のような国であつたろうということは容易に察せられる。『徳島の盆踊り』の「序文」ではないを書いたベント・カルケージャは⁸、モラエスの心性の本質を見抜いていたと思えるが、モラエスは、生涯、「日本」に対する幻想から覚めることはなかったのだといつてよいだろう。ロチが日本に対する幻滅から蔑視へと気持ちを変え、同様にハーンが、日本女性と結婚して日本に帰化しながらも、晩年には幻滅を感じ軽蔑を抱きながらその生涯を閉じたのと異なり、モラエスは、「日本」や「徳島」に対する失望や幻滅を、寛容に包み込んであくまで彼の楽園の世界として捉えようとしている。それは、生涯祖国ポルトガルの地を再び踏むことのなかった、あるいはしようとしなかったモラエスにとって、余生を送る場所、終の棲家の地と定めたが故に、いわばその反動としての思いでもあつたかもしれない。

III 「け・とーじん」考⁹

『徳島の盆踊り』の中に捉えられた「徳島」は、おヨネのふるさとであり、町全体がおヨネへの追慕に耽るための一種の寺院と化してゆくが、「徳島の概観」では、欧米化を急速に進める大都会から離れた、昔の風情を残している一地方都市としての「徳島」の概観を以下のように述べている。

徳島！・・・・私の住んでいる、私が居を定めた土地、なすこともなく、元気づけてくれる刺激もない孤独な人間がそぞろ歩きに踏みしめる土地・・・・この事実はあまりに異様で、ほんとうにそうなのか、時にはほとんど私自身が疑い、単に夢を見ているのではと考えるほどである。だが、私は夢を見ているのではない、そうではない。私はここにやって来た、ここにいる。

私は何よりも、私が住んでいるこの土地、私が死ぬこの土地、徳島のことを読者に知ってもらいたい。[・・・・] 書いた言葉で、未知の国を理解するということは容易なことではないが、日本という国のこととなるとそれがどんなことであれ困難はいっそう増すからである。他の事物や他の人々について私たちが獲得してきた様々の知識と比較すると、[この国の] 事物や人々の様相ははなはだ変わっており、風俗は特殊である、・・・・

いずれにしても徳島は、一見したところ、日本の、主として本州の他の地方都市と異なるような顕著な特徴をもたない地方都市である。(58 - 59)

徳島にはこのようなものは何ひとつない。互いに相容れず、したがって、当然ながら馬鹿げたものを盛んに産み出すことになるふたつの異文化の接触から結果する不調和は何ひとつない。ヨーロッパ人がまだほとんどいない、西洋化の波が非常にゆっくりとしか入ってこないここには、窓や西洋建築めいたその他のものを伴う建造物は減多に見られない。市役所、裁判所、銀行などのような公私の大きな施設は、必要に応じてわずかばかり手を加えただけで、純粋日本建築の疑いなく気品高い外観を全体として保持している旧時代の古い家を利用している。

日本のこの地は、真の日本の国の姿を見せてくれる。これは徳島の美点のひとつである。(71)

日本の古きよき姿を留めている徳島は、同時に、古風でしとやかな日本人女性としてのおヨネにつながるものでもあろうが、神戸が代表するような、西洋化を進める都会よりも「真の日本の国の姿」を留めた土地に対する思いには、現代の異邦人たちのまなざしをも感じざるを得ないのである。

モラエスが神戸から徳島に移って16年間も過ごして生涯を終えた理由が何であったか、今もって多様に推測され、決定的な理由を挙げるができないが、おヨネへの追慕に耽るためには、おヨネが亡くなった土地である神戸から離れおヨネの墓が作られた徳島に移ることが必要であったのであろう。それは、時代の先端をゆき急速に西洋化してゆく都会よりも、古い姿を留めている地方都市「徳島」によって、「過去」への手掛かりを得ておヨネとの「過去」へと遡ることでもある。「過ぎ越し歳月の思い出」を「判断し、論評する」には¹⁰、「過去」への手掛かりを探りつつ、同時に対象から、対象の存在していた場所から離れること、距離を置くことが必要である。「サウダーデ」(saudade)というポルトガル人独特の哀愁の感情を的確に説明するのは難しいが、その言葉の根底にある対象との距離感は、モラエスが神戸から徳島の地に移った理由、祖国ポルトガルとに決して帰ろうとしなかった理由とも関わるものであったと考えてもよからう。おヨネが亡くなった神戸の地を離れ、おヨネが生まれ暮らし、そしてその墓が建てられた徳島に向かうことは、距離を置くことと矛盾するようにも思えるが、おヨネの墓に毎日参ることは、この世にいるモラエスとあの世にいるおヨネとの絶対的な距離を感じさせるものでもあろう。

モラエスが徳島の地を自分の終焉の地と考えていたことは、彼が書き残した遺書にもうかがい知ることができる。モラエスは、徳島に移り住んですぐ後に、以下のような遺書を書き残している。

ワタクシハ モシモ シニマシタラ ワタシノカラダヲ トクシマニ
ヤイテクダサレ

トクシマ 大正二ネン七月二九日 モラエス

大正2年7月29日、つまり1913年の7月4日に徳島に到着して、そのわずか25日後にモラエスは上のような遺書を書き残し、それを壁に貼り付け、その上を風呂敷で覆い隠していたというのである。この遺書そのものは彼が亡くなった後に発見されており、彼の葬儀の仕方や遺骨の埋葬の

問題、さらに後に書かれた遺産相続の指示を巡っては当時物議を醸しさまざまな憶測がなされたようであるが¹¹、モラエスが徳島にやって来た時、徳島を自分の終焉の地にするという決意は生涯変わることはなかったのだといってよい。おヨネが亡くなった後、モラエスは、永原デンとの関わりもあり¹²、行き先をどこにするか迷ったとされているが、彼が長崎に入港して以来、とにかく日本で余生を過ごし生涯を終えるのだと考えていたことは確かなことのようにである。

おヨネのふるさと、おヨネの墓がある「徳島」は、彼にとって特別な場所であるが、その墓の数の多さに驚いて彼は「徳島」の町をこう捉えている。

繁華街を抜け出てさらに奥の方に入ってゆくとまた別の街区に出会す。この街区は、まどろんでいるかのように静かで、商店はほとんど見られず、住宅がたくさんあり、菜園、果樹園、稲田が散在している。そしてその先は、長いひとつらなりの山々が市の境界を画すことになる。それらの山々は生い茂る植物群におおわれ、少なくともその中腹まではみごとな神社仏閣、墓が立ち並び死者が住まうおびただしい数の墓地が密集している。徳島は、何よりもまず、神々の町、仏たちの町、死者の町である。……この稿で私たちは彼らすべてと知りあいになってゆくであろう。(66)

この印象は、モラエスにとってはある意味で好都合なものであったといつてよいはずである。土地によって墓地の場所のあり方は異なるが、山の奥や山の斜面だけでなく、平地の人家の庭先や畠や田んぼの中にも見られるという徳島での墓地のあり方、その風景は、筆者にとっても初めて目にしたときには多少の驚きであったが、モラエスが、徳島の町を眺めてそう思ったのは無理もないと思われる。「神々の町、仏たちの町、死者の町」であるが故に、モラエスにとっては「徳島」がおヨネのいる死者の世界に通じ得る世界であったと考えてもよからう。おヨネのことは決してはっきりと書かれてはいないけれども、モラエスを徳島に行かせる事になった「ある人」(192)がおヨネでありながら、それを明確に書かないという距離の置き方というものが、モラエスの想いを逆に強く浮かび上がらせることになる。ある意味ではそれが「サウダーデ」の本質であるのかもしれない。

「神々の町、仏たちの町、死者の町」徳島は、モラエスにとって喜びの地、楽園の世界の様相を帯びてくる。それ故に、「緑、緑、緑一色」の町「徳島」は、実際の暑さにもかかわらず爽やかに嬉ばしく思えてくるのであろう。「徳島の概観」で紹介される、街の様子、路地裏や家並み、そして家の中の様子、仏壇を中心とする日本の家庭のあり方など、モラエスの目には、すべてがおヨネへの追慕につながるものなのである。

かような「徳島」に溶け込み、モラエスはこの地で幸福な余生を送ることができるものと思うが、彼を取り囲む現実、彼の思いを萎えさせてしまう。モラエスは、この「徳島」では数少ない外国人のひとりであり、異邦人として蔑まれた目で見られていることを改めて痛感するのである。

そして、その印象は実に魅惑的であり、私は慈悲と恩寵の雰囲気につつまれて、通りすがりの人たちに思わず微笑みかけた。そして、その人たちも微笑みを返してくれたので私はその微笑みを、避難所として選んだこのもてなしのよい土地で心身の疲労を回復するようすすめてくれる心やさしい挨拶の言葉と解して、感謝したのであった。それが私の思いちがいであったことを、そしてヨーロッパ人を心底憎悪している無愛想で保守的なこの善良な徳島人の微笑みは、打明けたところ高齢のために背が曲がり、骨ばり、老いぼれた、このグロテスクな私という見本がまずいことに代表している白人に対する軽蔑と反感を、単にあらわしているにすぎないことを知ったのは、のちになってである。顔の半分をおおう私の長いもじゃもじゃのひげが、ひげのほとんどないさっぱりとした顔に立ちまじって、私をよりいっそう滑稽なものにしていたのである。(61-62)

まだ七歳にならないけれども小学校の一年生のひとりの子は、私と話すとき、私をていねいに「とーじんさん」(「さん」はセニョールにあたる)と呼ぶ。

「とーじんさん」はすなわち未開人、野蛮人、異教徒という意味であるが、昔のポルトガル人がモーロ人やユダヤ人を呼ぶときのペロ〔犬〕に多少似た、侮蔑的な調子がいくら含まれる。日本語にはまた中国人と区別して特にヨーロッパ人を指すのに、「け・とーじん」すなわちひげづらの未開人という語がある。

ここ徳島で、ひとりで散歩をしていると、いたずらっ子や野卑な人たちが通りすがりにその罵りのことば―「とーじん!」とか「け・とーじん」―をときどき口にする。日本の他の場所でも同じことがすでにあっただけけれども、ここほど頻繁ではなかった。

しかし、私に微笑みかけ、私にお辞儀し、私を「とーじん・さん」つまり未開人さんとていねいに呼んでくれるあの六歳の子は、きっと私を侮辱するつもりはなく侮辱することを知っているのでもない。ヨーロッパ人とかかわりがまだきわめて希れな地方や田舎では、内輪のおしゃべりでは白人はまだこんな風に、「とーじん」とか「け・とーじん」という侮蔑的な語でしか呼ばれないのだ。子どもたちはこれらの単語を家族の口から自然に学ぶのである。

人々が罵って口にするこれらの怪しからぬ呼び方をヨーロッパ人がいつも苦々しいおもいで聞くのはもちろんである。率直に言って、私自身、しばしばいやな気持ちになる。しかし、そんなに怒ることもないのだ。民族衣装の着物を着た日本人がポルトガルの地方都市や田舎に行ったとしたら、徳島のポルトガル人がうけている以上のやさしい扱いをされるであろうか?・・・

いずれにせよ、今日なお私たちが野卑な日本人からうけ、そしてつい数十年前まで公文書の中で日本政府が使っていた「とーじん」とか「け・とーじん」という屈辱的な呼び方は、人種の嫌悪、感情の対立、白人と協調し得ないことの単なるあらわれにすぎない。私たちが心から感嘆すべきは、長年にわたる祖先からの伝承によって凝縮され、すでにまぎれもない日本人の

民族性となっている、情熱の極致にまでいたっているこの愛国的矜持、この強い国民的連帯感である。日本人は、西洋列強の打算的保護から自由になって独立国としてすばらしい発展を遂げるための最大の刺激—大きな刺激—をこの民族性のうちに見出している。

このような事実の壮大さを前にするとき、二、三人のいたずら坊主、二、三人の車ひきから毎日「け・とーじん」と呼ばれるとしても、どうだというのか?・・・(256-7)

ここに描かれている日本人の微笑については、ラフカディオ・ハーンの記事のみならず¹³、異文化理解の問題でもよく指摘されるものである。欧米人には誤解を与える微笑、微笑の裏に隠された真意や軽蔑など、今でも変わることのない日本人のしぐさ、表情というものが、100年前のモラエスに対しても同じ衝撃を与えている。「け・とーじん」と呼ばれることの疎外感、「外国人」と呼ばれることに不快を感じる人たちの思いと同じものである。しかしながら、モラエスの目、モラエスの思いは、外交官といえば大げさであるが、知的な人間として公平な側面を示している。このあたりが、ロチやハーンのどちらかといえば一方的なものの見方とは少し違っているようである。

しかし、そんなに怒ることもないのだ。民族衣装の着物を着た日本人がポルトガルの地方都市や田舎に行ったら、徳島のポルトガル人がうけている以上のやさしい扱いをされるであろうか?・・・(256)

外国人が数人しかいない徳島で、モラエスは奇異な目を向ける徳島の人たちに寂しさと悲しさを感じつつも、その感情に流されることなく「判断し、論評する」¹⁴ということを行っている。それが、『徳島の盆踊り』を書くことの目的であり、ポルトガルの読者に対して、アジアや極東に対するあこがれに張り付いている軽蔑の念を少しでも払おうとしていてと考えてもよからう。そのことを端的にあらわしているのが、「け・とーじん」という言葉であると同様に、「あいのこ」という言葉なのである。

IV 「混血児考」

モラエスは語学に堪能であり、フランス語や英語は自由に使えたといわれている。実際、彼が情報源としていたのは、フランス語の文献であったし英語圏のものであった。神戸での領事としての仕事ぶりは、近藤文子氏の調査に詳しいが¹⁵、彼がフランス語で公文書を書いていたことは確認されている。日本語については、彼が書き残している日本語の文字などからすればたどどしくて¹⁶、苦勞していたような印象を受けるが、恐らく日本語の会話ではさほど不自由はなかったろうと思われる。おヨネとの出会いと一緒に暮らしを考えただけでも、まったく日本語ができなかったと想定するのは難しい。徳島にやって来た後も、住まいの長屋の住人たちや付近の人たち、あるいはコハルの実家の齋藤家とも深い交流があったのだから、たどどしくともある程度の日本語能力は有し

ていたと考えるのが妥当である。そのモラエスが、「混血児考」として、『徳島の盆踊り』の中で次のように述べている。

日本人は混血児を「あいのこ」(愛の子)と呼ぶ。混血児をファン・クアイ・サイ(白い鬼の子)と呼ぶ中国南部の人たちよりはていねいである。ていねいではあるけれど、西洋文明と無理矢理接触させられたその産物である彼らに対し、中国人より愛想がよいというわけではない。日本人は「あいのこ」を嫌悪する。愛の子、すなわち偶然の子! この語それだけで、概して偶然の、かりそめの、いやらしい出会いから生まれたこれらあわれな者たちに向けられる反感のすべて、軽蔑のすべてをあらわしている。日本人は「あいのこ」のひとりひとりのうちに、自分たちの強い国民的自負に対する明白な侮辱を、憎つき外国人の一時的気まぐれへの自国女性の犯罪的同意の産物を見るのである。(289-90)

Os japonezes chamam *ainoko* (filhos do amor) aos seus mestiços; mais polidos do que os chineses do sul, que chamam *fan-kwai sai* (filhos dos diabos brancos) aos seus mestiços. Mais polidos, mas não melhor dispostos para com estes productos do contacto forçado com a civilização ocidental. Os japonezes detestam os *ainoko*. Filhos do amor, isto é, filhos do acaso! ... O termo acusa por si só toda a aversão, todo o desprezo, votados a estes pobres seres, nascidos geralmente de encontros casuais, ephemerous e grosseiros. Os japonezes vêem em cada *ainoko* um ultrage vivo ao seu supino orgulho nacional, o producto da acquiescencia criminosa de uma mulher do seu paiz ao capricho momentaneo do estrangeiro detestado. (317)¹⁷

徳島には、私の知る限り、「あいのこ」はひとりもない。この点、徳島を祝福しなければならない。(291)

Em Tokushima não existe, que me conste, um só *ainoko*; é caso para felicitar-mos Tokushima. (319)

モラエスは、ここで「あいのこ」をローマ字書きにし「愛の子」(filhos do amor)としている。彼が、日本語の「合いの子」、「間の子」という言葉を知らなかったとするには無理があるし、上の引用においても「混血児」としての「あいのこ」の意味を十分に理解していることを考えれば、わざわざ「愛の子」としていることには、彼なりの主張や思いが込められているとみなしてもよからう。モラエスが「混血児」に相当する英語やフランス語を知らなかったはずはあるまいし、ましてやポルトガル語にもそうした言葉はあったはずである。上で中国南部の中国語を引き合いに出しているが、モラエスがマカオに滞在してアチャン(亜珍)と結婚し、ふたりの子どもをもうけていることを考

えると、その子供たちへの思いも汲み取ることができる。世界のどこにおいても「混血児」に相当する言葉に込められた反感もしくは軽蔑というものを、モラエスは是とはしてはいない。マカオには「マカオニーズ」(Macanese)という言葉があるが、その言葉に相当する自分のその子どもたちの存在を考えると、モラエスがここで「あいのこ」を「愛の子」としているのは、アチャンとの不和があったとはいえ、その子供たちへの思いを察することができるのである。

蔑称の「あいのこ」を「愛の子」と機知を生かして転換する時、それは言葉遊びを利用した高度な意味の価値転換となる。蔑称でしかなかった言葉が、新たに肯定的で価値観の高い言葉になっているのである。「け・とーじん」という言葉に、寂しい思いと悲しみを感じたモラエスは、幼い子どもが無邪気に「とーじんさん」と呼ぶことに対して、包容するかのような抑えたユーモアさえ漂わせているが、ここにもそうした一種のユーモアと機知を含ませて、蔑称、差別用語を止揚して、高度で崇高な言葉に転換することに成功しているのである。

V グローバリズム

今、海外から多くの人びとが日本にやってくる。日本からも多くの人びとが海外に出かけており、また海外に在住している。異文化理解の問題は、言葉の問題だけではない。生まれ育った土地から空気のように吸い続けた末に形作られるもの、前に引用した子供の「け・とーじん」、「とーじんさん」の無邪気な言葉のように、意識することなくいつの間にか刷り込まれてしまう言葉や価値観、習慣、そうしたものが、異文化と接触することによって浮かび上がって摩擦を生じさせる。モラエスというひとりのポルトガル人は、100年前にこの地徳島に16年間在住した。海軍軍人、総領事という栄誉も名誉も捨て、貯金もあり余るほどにありながら、モラエスは、当時伊賀町の四軒長屋の片隅で質素に貧しく忘れられた存在として暮らしている。様々な記憶を手繰り寄せながら、『方丈記』の鴨長明よろしく、透徹した目で「徳島」を、そこに住む人々を眺めている。庶民として等位置に立つことによって、それまで軍の士官として、領事として眺めていたモラエスは、今まで見えなかったものを見ているともいえるだろう。モラエスが徳島に来住した理由は、おヨネの故郷であったからというだけでなく、おヨネと等位置に立つことによって、これまで見えなかった庶民の生活を書こうとしたのだと推測することもできそうである。

注

- 1 *O "Bon-odori,, em Tokushima*, PORTO: LIVRARIA MAGALHÃES & MONIZ, 1916.
- 2 *O-yoné e Ko-haru*, PORTO: RENASCENÇA PORTUGUESA, 1923.
- 3 *Relance da Alma Japonesa*, LISBOA: PORTUGAL-BRASIL, 1926.
- 4 ヴェンセスラウ・デ・モラエス著、岡村多希子訳(2010)『徳島の盆踊り』(徳島:徳島県立文学書道館、ことのは文庫)より。以下、引用はすべてこの版により、括弧で頁数を示す。
- 5 気象庁のHPから検索できるデータによれば、当時の天気は小雨であったようである。また、

秦敬一氏の調査によっても、同様にこの日は小雨であって「夏の晴れた日の午後」ということが事実と反することになる。「モラエス来徳一〇〇年―一九一三（大正二）年七月四日―」『語文と教育』（徳島：鳴門教育大学国語教育学会，第二十七号），p. 38 参照。

- 6 岡村多希子（1994）『モラエスの絵葉書書簡』（東京：彩流社）参照。
- 7 姉エミリアへ宛てた手紙。岡村多希子（2000）『モラエスの旅―ポルトガル文人外交官の生涯』（東京：彩流社），p. 92.
- 8 『徳島の盆踊り』，pp. 16–17.
- 9 以降，現代では不適切とみなされる言葉を扱うが，当時の時代性と作品の趣旨を尊重し，原文及び訳語をそのまま使う。
- 10 『徳島の盆踊り』，pp. 189–90.
- 11 秦敬一（1989）「モラエス考―「遺言状」をめぐって―」『語文と教育』（鳴門教育大学国語教育学会，第3号）参照。
- 12 秦敬一（1997）「モラエス考―永原デンをめぐって―」『高大国語教育』（高知大学国語教育学会，第四十五号）参照。
- 13 小泉八雲（1926）「日本人の微笑」『知られぬ日本の面影』（東京：第一書房，小泉八雲全集第3巻）。
- 14 『徳島の盆踊り』，pp. 189–90.
- 15 近藤文子（2014）「W. de Moraes の 5993 日」（神戸外国人居留地研究会年報『居留地の窓から』第9号）。
- 16 先に示したモラエスのカタカナ書きの遺言やその他練習したと思われるカタカナ文字から推測できる。
- 17 ポルトガル語原文は，Wenceslau de Moraes, *O “Bon-odori, em Tokushima (Caderno de Impresses Initimas)* (PORTO: LIVRARIA MAGALHÃES & MONIZ, 1916) による。

参考文献

- Wenceslau de Moraes (1916), *O “Bon-odori, em Tokushima (Caderno de Impresses Initimas)* (PORTO: LIVRARIA MAGALHÃES & MONIZ)
- ヴェンセスラウ・デ・モラエス著，岡村多希子訳（2010）『徳島の盆踊り』（徳島：徳島県立文学書道館，ことのは文庫）
- 岡村多希子（2000）『モラエスの旅―ポルトガル文人外交官の生涯』（東京：彩流社）
- （1994）『モラエスの絵葉書書簡』（東京：彩流社）
- 近藤文子（2014）「W. de Moraes の 5993 日」（神戸外国人居留地研究会年報『居留地の窓から』第9号）
- 秦敬一（1989）「モラエス考―「遺言状」をめぐって―」『語文と教育』（鳴門教育大学国語教育学会，第3号）
- （1997）「モラエス考―永原デンをめぐって―」『高大国語教育』（高知大学国語教育学会，

第四十五号)

————— (2013) 「モラエス来徳一〇〇年—一九一三 (大正二) 年七月四日—」『語文と教育』(徳島：鳴門教育大学国語教育学会，第二十七号)

Abstract

Wenceslau de Moraes (1854-1928), a Portuguese, lived for sixteen years and died in Tokushima. His *O "Bon-odori,, em Tokushima* well depicts Tokushima and its common people 100 years ago through his loving eyes. It is most miraculous that Tokushima, a rural city and not a large city like Kobe or Osaka, was introduced to Portugal and even to Europe 100 years ago by one Portuguese. How he saw Tokushima and its people, living as a plain people not as a high rank Portugal Naval officer and afterwards a diplomat and consul in Kobe, is quite helpful to us living in this complicated modern 'globalized' world.